

「伊豆の踊子」小説と映画

西河克己

皆さんこんにちは。ちょっと伺いますが、「伊豆の踊子」という映画を、テレビか何かで見たことのある人、ちょっと手を上げてみてください。そう沢山いませんね。では、多少いい加減なことを言っても大丈夫でしょう。(笑い)

小説の方は読んだことがある人が多いと思いますが、非常に短いものです。ここに持ってきたのは新潮文庫です。これで見てもわずか三十四ページしかありません。内容も実に簡単なものです。旧制一高生がふらりと伊豆の旅に出たら、そこで旅芸人に出会った。その中に踊子、踊子といっても十四歳と書かれていますが、満では恐らく十三歳でしょう、そういう踊子を含んだ五人の旅芸人の一行に出会った。そして天城峠を越えて湯ヶ島から下田まで、本当は中一泊なのですが、二泊して行ったというだけのことなのです。

旧制一高生というのは今の東大生です。旧制一高二年の時、二十歳と書いてありますが、今の数え方では満十九歳で、東大駒場の二年生ということになります。二年になった初めというのですが、これは秋なのです。当時は九月入学ですから、九月が新学期です。小説の中にはこの旅の理由がちょっと書いてあります。川端さんとい

う人は、非常に早くに親族を全部亡くしてしまつた、お父さんもお母さんも。お祖父さんと十六歳までいっしょに住んだけれども、そのお祖父さんも死んだというようなことで、大変孤独な人なのです。ですから、孤独な自分が嫌になつたといいますが、たまたまなくなって独りで旅に出た。これはおかしな話で、察にいたのですから、大勢の学生がいたと思うのですが、また孤独になりたくて旅に出たということになります。大勢が嫌で、自分の孤独根性が嫌で独りで旅に出たら、こういう経験をしたという話なのです。

ところで、踊子と学生と言っても今とは違います。小説を読んだ人は分かると思いますが、ほとんど口はきかないのです。直接二人が口をきいて何かおもしろい話を話して親しくなるなどということは、当時はあり得なかつたことなのです。というのは、当時は階級社会でした。今のインドみたいですね。階級差というものがあつたのです。旧制一高の学生という人は、当時は旅芸人と親しく口をきくような人ではないのです。身分だけではなくて、もう一つ、見ず知らずの初めての男と女は、どこで出会つてもそう簡単に口をきかない。こんないろいろな条件で、ほとんど口をきいていないので

す。それが当時は自然なことであったのです。

このようなストーリーですから、映画にするというのは大変難しい。ただ会って、大して口をきかない。二日か三日そうやって別れてしまった。これはどうしても映画になりませんね。なつても、今の人には納得出来ません。もうちょっと何か口をきいたりしそうなものだというので、映画は非常に違うものに作られています。

「伊豆の踊子」の映画が初めて出来したのは、昭和八年です。それから六回映画化されています。ちょっとメモを見ますと、一番最初は一九三三年、昭和八年。もちろんこれはサイレント映画、無声映画です。俳優さんが出て何か言っているけれども、音はないのです。ただ、この時代にはサウンド版と言って、伴奏音楽だけ映画館でレコードで掛けるようなことがあります。この映画もサウンド版というような形で、映画館によっては上映された。当時「涙の渡り鳥」という歌謡曲、当時は流行歌というのですが、これが大ヒットをしたので、それを流すことが多かったようです。

「伊豆の踊子」というのは、今では大変有名なタイトルです。JRにも踊り子号というのが走っているぐらいです。天城越えのバスには土曜、日曜あるいは行楽シーズンには踊り子の格好した車掌さんが乗っているバスがあるというような状況ですが、実は小説が発表された時には、全く無名の小説だったのです。

ですから、これを第一回に映画化した監督五所平之助は、これ何とか映画にしたいと会社に言ったけれども、絶対に駄目だと相手にされなかった。そして三年ねばってようやくこれを映画化しました。五所平之助は当時は花形監督、大変お客さんのくる映画を作る監督であったために、お正月映画などをよくやっています。「花

嫁の寝言」とかいような、随分程度の低いといえますか、しかしお正月映画らしい、おもしろおかしい映画というような企画があった、それはやりたくないけれども、それをやる代わりに「伊豆の踊子」をやらせて欲しいというような交換条件でやっとこれを映画化したというような事情であったようです。

当時の川端康成は二十七歳です。ただし二十二歳の時に「湯ヶ島の思い出」という、約百枚ぐらいの文章を書いていたようです。その後、二十六歳ぐらいの時に、当時東大の学生で横光利一とか、片岡鉄兵とか、後に新感覺派と呼ばれるようになる人達と「文芸時代」という雑誌を出した。その「文芸時代」に載せるための小説として、「湯ヶ島の思い出」の中から踊り子のことだけを抜き出してまとめたのが、この「伊豆の踊子」の始まりなのです。

ところが、それも最初に書いたのは、今ここにある「伊豆の踊子」という小説の半分ぐらいしかない、更に短いものです。この本でいいますと第四章まで、二十ページ分を書いたら、それが割に評判がよかったです。そこで続いて二月号にも十四ページ分を書いて、そして後にそれをついにまとめたようです。

ところが、この「文芸時代」というようなものは、いわゆる一般の大衆誌ではありません。当時は純文学とか、大衆文学とかいって、はっきり分かれておりましたので、純文学の小説を書いている限りは一生飯は食えないというような程度のもんです。ですから、恐らく発行部数も二千部とかそんなものであったらうと思われれます。そこに載ったものは大した扱いを受けない。映画会社に持っていったことがないというようなものです。

ところが、この小説が映画になりましたら、これが爆発的なヒットになりました。そして一般の人が川端康成という人の名前を覚えるようになり、作者の名前よりも「伊豆の踊子」というタイトルが大変有名になっていく。それ以後何度か映画になりました。遂に六回映画になったために、今では小説を読んだこともない、映画を見たこともない人も、この「伊豆の踊子」というタイトルだけは知っているというようになったわけです。一番最初の五所平之助監督は田中絹代と仲がよかったので、田中絹代が踊り子になったのです。この人は当時大スターで、大変人気のある人だったので。「伊豆の踊子」が有名になる一番大きなきっかけは、実は田中絹代という人が踊り子になったからなのです。映画館にもお客さんが沢山来て、「伊豆の踊子」が有名になった。そしてついでに川端康成も有名になったのです。

その次は戦後の昭和二十九年です。松竹映画が「伊豆の踊子」をもう一回やったのです。この時は野村芳太郎という監督で、「砂の器」などという映画で有名な人です。そして踊子は美空ひばりです。ひばりの人気絶頂のころです。「りんご追分」という歌が大ヒットした年で、十七歳です。相手役は石浜朗という、当時有名な美少年です。それにはこういう笑い話が残っております。美空ひばりは私の相手役は誰になるか、誰になるかと非常に心配していた。石浜朗に決定したと言ったら、持っていたお寿司を空へ投げて、飛び上がって喜んだという、そのぐらいこの人は美少年だったのです。

そして、昭和三十五年になって、また映画化されました。やはり松竹です。川頭義郎という監督です。

この時は、鰐淵晴子というきれいな女優さんが踊り子になりました

た。この人はドイツ人とのハーフです。そして子供の時からパイオリンの天才少子として有名だったのと同時に、大変な美少女として話題になった人でした。この時は十五歳です。ところが、この人はちょっときれい過ぎる人でした。きれい過ぎて、どうも日本人には親しみが持てない。ましてハーフだと親しみを持たれないというので、ちょっとミスキャストだというふうに言われたものです。そして驚くべきことに相手役が津川雅彦なのです。いま津川雅彦というと、中年のいやらしいことをさせれば一番うまい人ですが（笑い）この当時はそうではないのです。貴公子という代名詞が付いたぐらい、大変ノーブルなる美少年であったのです。

昭和三十八年になってから、僕が初めてこの「伊豆の踊子」の映画をやりました。この時は吉永小百合で、まだ十八歳の時です。相手役は高橋英樹、これは皆さん知っていますね。このころは清潔感溢れる美少年でした。お父さんが千葉の県立高校の校長先生で、非常に真面目な家庭の人です。

昭和四十一年になって、今度は東宝でやりました。恩地日出夫という監督で、この人は今でも活躍しています。テレビなどに度々出て来るので皆さんも名前を知っていると思います。この時の踊り子は内藤洋子という、非常にかわいい人でした。当時十六歳でした。ただ、相手役は余りかわいくもきれいでもなかった黒沢年男という、今ではちょっと意外なキャストでした。

昭和四十九年になって、また私が二度目の映画化をしたのです。

これは山口百恵、相手が御存じ三浦友和で、この時が彼と彼女の初めての出会いだかったです。出会いというか、私が無理矢理に三浦友和を結びつけたというわけで、結婚式に呼ばれた映画監督は私一

人でしたから、実質上の仲間みたいなものです。

こういうふうにも六回も映画化されるといふことは、やはり「伊豆の踊子」というタイトルが極めて有名になって、なおかつ非常に魅力的であるといふことなですね。もう今や原作を読んで感動したからなどということはどこかへ行ってしまうて、何だか分からないけれども「伊豆の踊子」という字面がいい。温泉があつて、そこで踊ったりするといふ感じ、そして何かしら若々しいとか、いろいろなことがここに集約されているような感じのタイトルなのです。このために、「伊豆の踊子」というタイトルは、今や極端に言うならば川端康成をも離れて一人歩きをする、観光的タイトルといふふうになっていいかもしれません。

伊豆の観光地には、「伊豆の踊子」の銅像が三か所建っています。文学碑は五か所ぐらいあります。そのぐらい今や観光資源として大事なタイトルになっているのですが、事の起りはさつき話しましたように五所平之助の第一回の映画化が大変成功したからです。

では、五所平之助の第一回の映画化といふのは、原作の「伊豆の踊子」をどういふふうにやっただかを見てみますと、まるで原作と関係のないストーリーを作つて、映画として発表したのであります。にもかかわらず、普通の人は原作など全く読んでいませんから、もともと原作がそういうものだといふふうに受け取っています。そして、人気スター田中絹代が踊り子になってやればいいわけですから、タイトルも「恋の花咲く伊豆の踊子」と大きく書いてありました。ただの「伊豆の踊子」では当時だめだったので。そういう事情で、実は文芸作品として有名になったのを映画化したのではなくて、映画になったために文芸作品が有名になり、またタイトルが有名になつ

て今日に及んでいるといふのが真相、といふふうに言つていいかと思ひます。

もう一つ、この六回の映画化を調べてみますと、今言つたように原作に全く関係のないのが第一回作品なのです。そして、二回、三回、四回と重なるごとにだんだん原作に近づいて、六回目の作品が一番原作に近いのです。これは非常に不思議な現象です。映画といふのは、有名なタイトルのものは何度も映画化されたりします。いわゆるリメイク作品といふのは今でも沢山あります。「細雪」を何回やつたとか、「青い山脈」を何回やつたとかいふようなことが何度もあるのですが、そういうものは最初は比較的原作に近いのです。原作が大変好評であつたから、原作のいいところを生かそうとして映画化するわけですから、第一回のもが原作に一番近いのです。

例えば「青い山脈」といふような映画でもそうです。第一回目のものが石坂洋次郎の原作に一番近いのです。そして二回、三回、四回と重なるごとに、時代も変わるし、人も興味が変わる、あるいは飽きてくるといふようなことで、だんだん原作から離れて、いろいろな工夫をしておもしろおかしくするといふのが普通なのです。

ところが、この「伊豆の踊子」だけは非常に不思議なことに反対なのです。それはどういふ理由か。原作が非常に単純で通俗性がなから、第一回のもはまるで原作とは違つて、登場人物からして違ひます。いろいろな人物が出て来ます。そして親子関係、夫婦関係あるいは兄弟関係、因果、因縁、生きぬ仲などといふややこしいことまでいっぱい出て来るようなストーリーです。映画といふものは、当時は活動写真ですが、そういうものが面白いのであつて、この原作のような極めて単純なものは映画にならないし、映画としては扱

われないという通念があったのでそうなってしまうたのです。そのうちにだんだん時代が変わりました。タイトルも有名になったけれども、原作もちゃんと読まれるようになりました。同時に川端康成という人の名声も高くなる。後にノーベル賞をもらうまでになる。そこでだんだん原作に近い、非常に単純なストーリー、単純な人物配置、起伏の少ない、けれどもそのことが原作の一つの魅力であり、意味があるというふうに理解され、映画として通用するというふうになってきた。ということ、映画の観客が進歩したということにもなります。社会全体が情報豊かになり、同時にまた観客の知的レベルが上がってきた、社会の変化とともに、そういう原作の持ち味を生かすということでも、十分映画として、興行として成り立つというふうになってきた。この作品に限り社会の通念から逆行しているような現象は、そういうことのために起きていると考えればいいと思います。

この六回の映画化の主人公が、それぞれその時のスターで、田中絹代さんを除いて新人スターです。田中絹代さんは、この時二十三歳で、離婚してから一年経っているのです。こっそり結婚したわけでもないのですが、今ほど週刊誌が発達していませんから、一般大衆には余り知られていなかったのです。そして一番若いのが山口百恵十五歳、鰐淵晴子が十五歳、美空ひばり十七歳、吉永小百合は十八歳、内藤洋子は十六歳だったのですが、何とおかしなことにこの六本の映画を見ると——これは僕の感想ではありません、ほかの若い人の感想ですが——何と一番かわいらしいのが二十三歳の田中絹代さんなのです。美空ひばりなどは、今見ると憎たらしいような感じの十七歳の少女なのです。かわいいということの意味合いは随

分違うものだと並べて見て皆が驚くのです。何で離婚してから一年経っている田中絹代さんが一番かわいいのか、不思議に思います。やはりこれも社会の変化です。若い人が大人になっているのか、昔の人が無邪気だったのか、あるいは演技力があつたのか、その辺は分かりませんが、不思議な現象に思えます。

そしてこの「伊豆の踊子」は、この映画に主演すると、ワンステップあるいはツーステップ、俳優として有名になる。つまりスターとして大きくなると言われるようになりました。ですから、新人スターとして出て来た人をここでもう一発大スターにするためにというような意味合いで、「伊豆の踊子」が企画されるというような傾向にあります。最後の山口百恵の時も、もちろんそうです。これはずっと今でも変わりません。

ただ、どういうわけか、昭和四十九年以後作られていないのです。いま天城峠を越える道には、観光道路として銅像も建っていますし、いろいろな案内板が立っています。その天城峠の登り口に、第一回の作品を撮った五所平之助監督の句碑、この人は俳句の名人なので、この人の句碑が建っています。「踊子」といえば朱の櫛、天城萩「これはどこが建てたか」というと、湯ヶ島町の観光協会が建てたのですが、その句碑の裏に、句碑を建てた由来のようなものが書いてあります。その下に九本の線が引いてあり、第一回の田中絹代さんから六人の名前がそこに順番に書いてある。どういうわけかちゃんと線が引いてありまして、六人分は刻んであり、あと三人分が空白になっているのです。というのは、湯ヶ島町の願いとしては、あとまだ三回ぐらいいは映画化されるだろう。その時、これに名前を刻み込みめばいいというので、山口百恵の映画が出来た後にこれを建てたので

す。ところが、残念ながらいまだに空白なのです。昭和二十九年以後は数年毎に映画化されているのに、四十九年以降は映画化されな
いという非常に不思議なことになっています。湯ヶ島町の観光協会
の人に「どうして映画化されないのでしょうか」と聞かれたりする
のですが、僕も分かりません。

川端さんという人は大変映画の好きな人でした。映画が好きで、
なおかつ若い女の子が大変好きな人だったので。女優さんのプロ
ダクションの顧問をやったこともありました。

私の知っている秘話をひとつ、ここで御紹介しておこうと思いま
す。それは昭和三十八年の吉永小百合主演の映画化の時でした。私
はその前に二度川端さんの原作を映画化しています。いずれも新聞
連載小説です。「東京の人」という、今はもう歌手三浦光一のナツ
メロで、たまにどこかでやるような歌だけ残っているタイトルです
が、もう一つは毎日新聞連載の「風のある道」です。「伊豆の踊子」
は三度目でしたから、何回も川端さんにはお会いしていました。鎌
倉の長谷の家とか、軽井沢の別荘とかへ、打合せのために度々行き
ました。新聞連載小説というのは、連載中に映画化が決めますが、
映画というのは映画化するにおしまいがなくては出来ないもので
ですから、「ラストはどういうふうになりますか」と聞きますと、
川端さんは「ラストは決まっていますよ」と必ず言うのです。
冗談に言っているのかと思うと、そうではないのです。あの方は何
も決めずに書き出すというようなやり方の人なのです。よく「ラス
トシーン」は映画の人の方が作るのがうまいから、何か適当に作っ
ておいてください、私がそれを真似して書きますから」というふうな
ことを言われました。まんざら嘘でもなく、映画が出来た後から小

説が完結したのを見ますと、どうも半分ぐらい映画のラストを真似
して書いているというようなものが多かったのです。そういうふう
に映画の大変好きな人でしたが、そこに出て来る若い女の子は更
に好きな人なのです。昭和三十八年の時には、吉永小百合がなぜか大
変お気に入りでした。そこで、原作を少し変えなければならぬ、
こういう具合にストーリーを変更したいとか、こういう人物を増や
したいとか、ちょっと言いにくいことを言いに行く時は吉永小百合
を連れていくのです。川端さんは、全集などに載っている写真を見
ると相当怖い顔していますね。目玉がギョロッとして、かなり怖い
感じの顔をしているのですが、あの顔がニコニコするのです。で
すから、吉永小百合を連れて行って、何か話している間に、「実はあ
そこるところをカットしましてこう直したい」とかというようにな
ことを言うと、「えー、えー」とろくに聞いていないのでOKになると
いうようなことがあります。僕も随分利用したものです。

三十八年、映画化で伊豆へロケーションに行っていました。湯ヶ
野の宿を出発した学生と踊子の一行が、間道を抜けて下田へ下りて
いく、こういう場面の撮影ですから、車も何も通らない、いわゆる
下田街道でない、天城街道でない道、人間だけが歩けるような、そ
ういう山道、峠に近い、高いところというようなところを撮影する
ために下田に泊まっていたのです。

そうしましたら、新潮社の編集長から電話がかかってきました、
「実は川端さんとこちらに來ているのですが、ちょっと川端さんと
代わりますから」と言うのです。アレッ何しに來たのかなと思って
電話に出たら、「ちょっと取材があつて來たのですよ、ちょっとそ
っちへ行っていいですか」と言うのです。「いやー、先生が見えて

いるのでしたら、吉永と高橋を連れて伺いますから、どうぞそちらでお待ちになってください」と言ったのですが、「いいえ取材ですから、何かみんなの住んでいる雰囲気を知りたいのですよ」などと言って、間もなくやって来られました。取材と言っても話題があるわけではないのですが、吉永小百合と話がしたいのです。

僕は前々から一つ聞き忘れていたことがあったのです。それは五所平之助の句にも出て来る朱の櫛が原作に出て来るのです。その櫛の形がどうであったのか、二つぐらいのものを留意したのですが決定しかねていたので、「櫛はどんなものだったのでしょうか、どっちが当時のものに似ていますか」と言ったのですが、「えーえー」と言うばかりで、さっぱりそれに回答してくれないのです。しつこく聞きますと、「いや何しろ昔のことでどうも……」などというようなことで、話は吉永小百合の方へ行ってしまふのです。

もう一つ、僕は五万分の一の地図を出して、間道を抜けるところですが、「明日撮影するので、我々はここだろうと思っているのですが、この道ではないのですか」と聞いたのですが、地図もろくに見ないのです。「何せ昔のことで……」とばかり言って、あとは吉永小百合と話しているのです。これではしょうがないやと思って諦めました。そうしたら何と明くる日、川端さんがやって来たのです。そこは車が行かないところなのです。五〇〇メートルぐらい山道を歩かないと行けないのです。車を降りて、その山道を新潮社の編集長に手を取られてとほとほとやって来ました。ちょうどお昼ごろになったので、「せっかく川端先生が見えたのだから、ここで一度食事しましょう」と言って食事しました。川端さんは吉永小百合と話がしたいわけですから、あの怖い顔が恐らく普通の人は見たことが

ないような極めてニコニコした顔になってしまふのです。その時に、私はスチールマンという写真を撮る係に、「何でもいいから五、六枚写真をおバチお撮ってあげ」と命じておきましたから、いま私の手元に、あんなニコニコした川端康成を見たことがないという程の写真が数枚残っております。そのぐらい川端さんは、御執心といいますが、吉永小百合が好きで、人に手を取ってもらわないと歩けないような山道をやって来たのですね。もうすでに大作家で、ノーベル賞授賞のちよっと前でしたが、われわれは本当にびっくりしました。

みんなが想像するのと違った、さっきのラストシーンの話ではないのですが、映画のことに關しては極めて碎けた態度をとる人だったのです。後に、川端さんは自ら命を断って亡くなられました。山口百恵を映画化したときには、もう川端さんはおられませんでしたので、私はお墓に行つて、墓前に報告しました。

吉永小百合の作品が出来てから、幾つかの銅像が建ちました。吉永小百合の「伊豆の踊子」は、かなり大きな何かを人々に与えたというのも確かですし、そのことは、あの川端さんが吉永小百合の中に見たもの、あんなに執着したものとどこかで繋がるかもしれないと、私はときどきそのことを思い出してそういう気がいたします。

(平成三年十一月二十九日、第二十六回文芸学会の講演から)